

出会いの福音

まえおき

人生は「出会い」と申します。人は生まれて母親・父親に出会い、兄弟、友だち、先生、伴侶と次々に出会って、人間を形成し、人生を織りなしていきます。

今回も私は何人もの方々との出会いを通して、初めて伊志嶺勲先生と出会い、先生の主に在るご厚情とご親切なお招きに与って、ここに立つことになりました。

そこで今朝私は、「出会い」こそ、私どもが聖書を通して伝えられた主イエス・キリストの福音の大切な一つの要素であり、信仰の出来事であるということ、私自身の証としても、お話し申しあげたいと考えた次第です。

まず「出会い」という言葉のことですが、「出会い、出会う」という語は、新約聖書の原語であるギリシア語で「ヘウリスコー」と言い、新約聖書中170回程も使用されている重要な言葉です。もともと「(一所懸命に探して、ついに)発見する」という意味で、「探しなさい。そうすれば、見つかる」(マタイ7:7)という有名な句がその代表的用例です。殆どの場合「見つける、見いだす」と訳されています。

古代ギリシアの哲学者アルキメデスが、風呂の中で「アルキメデスの原理」として知られる浮力の法則を発見したとき、喜びのあまり裸で風呂をとび出して行き、「ヘウレカ、ヘウレカ」(われ発見せり)と叫んだという有名なエピソードの、あの言葉です。

1

今朝は、この語が用いられている典型的な箇所を3つ取り上げたいと思いますが、第一は今の話とも一脈通ずるところのある次のイエスの語られた2つのたとえです。趣旨は同じなので、一つだけを読みます。

天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。（マタイ 13 : 44、もう一つは 45～46）ここに「見つけた」「見つける」と2回出てきます。

私は戦争世代の人間で、昭和大戦末期海軍予科練に志願し、2年足らずの兵役ののち三重県の鈴鹿航空隊で敗戦を迎えました。焼け野原の東京に帰り、戦後の大混乱の中で人生を模索しているときにキリスト教に出会いました。夢中になって聖書を読み、多くの良い聖句に出会いましたが、最も私の心の奥深くに刻まれた言葉の一つがこのイエスのお言葉です。その時、私は私なりに私の「持ち物をすっかり売り払って」、「その畑を、良い真珠を」買ったのでした。主イエス・キリストの福音に生きること、その福音を伝えることに生きること、を決心させられたのでした。

私がここ宮古島の伝道応援に参加したのは、（注1）1952年、53年の二た夏ですが、それは私がそうした決心をしていくらも経っていない頃ですから、その時この青二才の伝道者が当時の宮古神社の廃屋でどのような話をしたのか、思い出すだに恥ずかしい限りです。しかし、その時私の心中にこのイエスのお言葉によって生まれ出た感謝と喜び、そして国仲寛一先生（その時既に故人）と益子夫人（注2）の神と郷土への愛に押し出された「初めの愛」（黙示録 2 : 4）があふれていたことは確かであると存じます。

2

福音を「見つけた」ということは、その福音を私どもにもたらして下さった主イエス・キリストに出会うということであり、彼の弟子となるということです。2番目の箇所として、

「ヨハネによる福音書」第1章の後半35節以下を取上げます。

この部分には、新共同訳によると「最初の弟子たち」と「フィリポとナタナエル、弟子となる」という二つの小見出しがついています。要するに、イエスが最初の弟子たち、ペトロ、アンデレ、フィリポ、ナタナエルをお召しになったという記事です。なにぶん長いのでここで全部を読むことはしませんが、イエスが最初の弟子たちをお召しになった事件が、まるで一幅の絵画を見るように美しく描かれています。

そして、実はここにもこの「ヘウリスコー」（見つける）という語が使われているのです。「イエスが弟子（フィリポ）に出会った」（43）、「弟子たち（アンデレ、フィリポ）がイエスに出会った」（41、45）、「弟子たち（どうし、アンデレとペトロ、フィリポとナタナエル）が出会った」（41、45）と全5回、息もつかせぬ劇的な「出会い」ではありませんか。

聖書の中でも最も文学的と言っていいこの一編に、日本語訳聖書（新共同訳、口語訳ともに）は、この名訳（「見つける」を「出会う」に）をもって花を添えていると言えましょう。

ところで、いま「劇的な」と言いましたが、出会いはいつも劇的とは限りません。いやむしろ、本当の出会いはしばしばもっと地味で日常的なものです。人は、たとえば夫婦の間のように何年も生活を共にして初めて出会うこともあり、人生の道行きにふと立ち止まって越し方行く末を思いめぐらす折に、誰彼との出会いを今初めてのそののように実感することもあります。出会いはその意味で一期一会であり、また忍耐と寛容の持続的経験でもあります。このことは、私どもの主イエスとの出会い、キリストの福音との出会いにおいても全く同じでありましょう。

こうしたことを頭に置いて、3番目最後の箇所を読むことにします。それは「ルカによる福音書」第15章です。余りにも有名な「放蕩息子のたとえ」の章ですが、実はこの章は3つのたとえ話から成っていて、そこには一つの主題が貫いています。それは「見失った一匹の羊を見つけ出す」(4～6)、「無くした一枚の銀貨を見つける」(8～9)、「いなくなっていた(一人の)息子が見つかった」(11～32、24、32)というもので、英語で「遺失物取扱所」のことを“the lost and found (office)”と言うそうですが、正にそれです。失せ物が見つかった、という語です。しかも百匹のうちの一匹、十枚のうち一枚、二人のうち一人、という見事な修辭(漸増法)も見られます。

そして言うまでもなく、ここに「ヘウリスコー」があります。ただ前の2箇所と全く異なって、「私が宝を見つける、私がイエスに出会う」というのではなく、その正反対に、「私(3つの話の中では羊、銀貨、息子)は失われていたのに見つけられる、出会われる(出会いを与えられる)」という話なのです。実際「放蕩息子のたとえ」では「いなくなっていたのに見つかった」と、文字どおり文法で言う「受身形」が用いられています。

これら3つのたとえにおいて「羊と銀貨と放蕩息子」は私ども人間に、「羊の持ち主、女、父親」は神に擬することができます。そうして「出会い」ということを改めて考えてみますと、「出会い」は普通二者が互いに対等の立場で出会うのですから、そうであれば私どもが「神に出会う」ということなど到底できません。「隠れたところにおられて、隠れたことを見ておられる神」(マタイ6:6)に、私どもの方から出会うことなどできるわけがありません。

これら3つのたとえはすべて、神が罪のうちに「いなくな

っていた（失われていた）」私どもを「見つけて」、「死んでいたのに、生き返らせて」下さったという事実を語っているのです。あのナタナエルが自分からイエスに出会った（彼はそう思っていた）のではなく、その前からすでに「イエスが彼がいちじくの木の下にいるのを見ておられた」（ヨハネ 1：48）ように、あるいは放蕩息子の父親が「まだ遠く離れていたのに、息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」（ルカ 15：20）ように、常に神の方からお出で下さって私どもに出会って下さるのです。考えてみれば、前の2箇所でも本当の主語は決して「見つけた、あるいは出会った私」ではなく、「隠されていた宝」そのもの、「出会って下さったイエス」その方でありました。

だからこそ、私どもが「いなくなっていたのに見つかり、死んでいたのに生き返った」（24、32）時、まず「見つけた」側に、「天に、神の天使たちの間に」（7、10）、「父（親）（22～24、31～32）」なる神に「大きな喜びがある」（7、10、32）というのです。

そればかりでなく、何と有難いことに、私どものために「祝宴を開いて」（24、32）、その「喜びと楽しみ」（32）を私どもに頒け与えて下さるというのです。私どもが出会った御方が「メシア＝キリスト」であり（ヨハネ 1：41）、私どもが見つけた「高価な真珠」（マタイ 13：46）が、「福音（喜びの音信）」と呼ばれるゆえんです。

むすび

もう一度申します。私どもがいかに遠く深くに失われていようとも、神は必ずその愛をもって私どもを見つけ出して下さいます。私どもがイエスに出会って救われるのではなく、イエスがその恵みをもって私どもに出会って下さって救われるのです。ここに「出会いの福音」の奥義と祝福があり、こ

ここに「出会いの福音」の感謝と喜びがあります。

(付記) 「出会いの福音」について、さらに気付きましたことを一つ付け加えて祝辞に代えたいと存じます。それは、私どもの個々の出会いを、主の愛に結ばれた絆の一つ一つの結び目と考え、これを「ヘブンリー・ネットワーク」と呼びたい、ということです。全世界に張りめぐらされた無数の愛と信仰の結び目(天網)がいかに豊かで、広大で、かつ細やかであることか。私どもは唯々感嘆し、感謝するのみではありませんか。そして私は、それこそが「キリストの教会」であると信じるものです。

60年という長い年月にわたって、この福音宣教に献身的に従事して来られた伊志嶺勲先生と平良キリストの教会の皆様に対し、心からの敬意と謝意を表します。(感謝会にて)

(所載) 『十字架の祈り』 17

十字架の祈り社 2014年10月

— 2013年11月17日

沖縄県宮古島市「平良キリストの教会」

宣教60年記念感謝礼拝において

注(1) 私がまだ「教会」に在籍していた時、その「教会」(「馬橋キリストの教会」)に送り出されて。

(2) 国仲寛一は敗戦1年後に東京から帰郷、宮古島で教育と福音伝道に献身、1949年に40歳で早世。益子夫人(1991年没)が私の直接の友人。

[参照: 一色哲『南島キリスト教史入門』(新教出版社、2018年、索引「国仲寛一項」)。